



2024年11月

アラウコ社日本代理店
サカキバラコーポレーション

チリラジアータパインの現状と今後の見通し

1. チリ社会

サンチアゴ市内は10月後半より最高気温が30度になる日や最低気温が10度台まで下がる日など気温の変化が大きい春になっています。

チリ中央銀行は10月18日に政策金利を5.5%から5.25%へ引き下げました。2023年7月以降、11.25%から引き下げが続いています。

消費者物価指数は年率3.5%で落ち着いています。銅価格は4月から世界的に銅の需要が増えて5月に5.0ドルを超えて過去最高値になり、6月以降は4.3-4.5ドル台で高値推移をしています。中国経済の低迷が続いていますが、引き続き中国からの買いは継続しており、特に半導体分野からの需要が堅調のようです。

為替はドルに対して900-950ペソで小幅な変動になっています。

2. 世界市況

中近東市場は引き続き需要が強く、今年は欧州スプルーース製材の輸入減少をチリ製材でカバーしている市況が続いています。最近では4m材だけではなく、3.3m、4.8m材の販売数量も増えてきており、日本市場と重なる長さも出始めています。

韓国市場も欧州材、NZ製材の輸入数量減をチリ製材でカバーしており、従来通り4mと4.5m材が主流で販売数量は堅調です。今年の日本への販売数量は約175,000m³を予定しており、昨年より約6%減少する見込みです。5番船の入港が年内12月から来年1月に遅れる為、年初予測していた輸入数量から1バルク船が減ります。

3. 日本市場

a) バルク配船スケジュール

2024年9月配船(4番船)は川崎港へ11月6日に入港予定となっており、名古屋、大阪へ下旬までに寄港を終える予定です。

12月配船(5番船)は12月中旬以降に現地を出港する予定で、日本入港は来年1月後

半からになりそうです。来年の配船スケジュールはバルク船を年間6配船(60日間隔)で計画をしていますが、アラウコもCMPCも3番船以降は船内スペースを満船に出来ない状態が続いており、船運賃の高騰により日本の販売収益が他国より低くなっています。今後のバルク配船の数量によっては、バルク配船数を6配船から減らして、コンテナ配船をバルク配船の間に組み入れる併用型も検討されております。しかし、日本向け空コンテナの確保、森林からの伐採、生産スケジュールの見直し、日本の各港のインフラ設備等、解決しなければならない課題も多い現状です。

b) 梱包市況

梱包需要は引き続き、中国向け輸出の回復はなく、期待された秋需要も静かでしたが、10月後半から木箱、矢板、パレット需要が出てきています。国産杉製材の安定した価格は、為替に変動するチリ材、NZ材より市場に受け入れやすい市況です。梱包材向け専用の杉製材工場は少なく、建築材との併用で製材している中小の製材工場が多いです。しかし、住宅市場が低迷をしており、梱包市場に参入をしてくる杉製材業者も多い現状です。今後の住宅市場の需要によっては梱包材から建築材へ戻る杉製材業者もおります。チリ材、NZ材、国産杉製材の併用が増えてきている市況です。

7月に入荷した2番船は各地2000-3000円の値上げを8月以降始めておりますが、国産材、NZ材と競合する中部、関西エリアは価格の値上げスピードが遅い市況です。

8月より為替相場が円高ドル安傾向の140-145円レンジで、値上げの受け入れに難色をするユーザーもいましたが、10月以降は150円を超える円安ドル高傾向に戻っており、今後は国内価格の値上げが浸透する市況になりそうです。

12月配船(5番船)の交渉は前回船より価格据え置きで交渉を終了しました。

当初は為替が円高ドル安傾向でしたので、チリサプライヤーは日本と他国の収益率を改善する為に製材価格の値上げを検討していました。しかし、杉製材との価格差、輸出梱包材の需要減、為替の円安ドル高への戻りもあり、製材価格の値上げは実現しませんでした。価格が据え置きでも、各社の購買意欲は低く、販売数量は3番船、4番船同様に低い水準で終わりました。よって各社のチリ材在庫水準は高くはありません。

c) アラウコ乾燥材(KD)

アラウコは今年5月に閉鎖しました、エルコロラド工場(2番)のKD設備をコンセプションから約400km南下したバルデヴィア工場(8番)へ来年1月に移設することを決めました。バルデヴィア地域はコンセプションより雨季の期間が長く森林火災のリスクが低いです。今後森林から伐採される丸太も潤沢にありますのでKD材が増えても生産の対応が可能です。

今後、日本向け薄物製材を再開するかどうかの検討にも入ります。

以上